

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月28日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22560617

研究課題名（和文） 現代日本住宅の家族共用空間拡充の動向と計画課題の解明

研究課題名（英文） Evaluation and Issues of Planning of the “Common-Space” on Contemporary Housing in Japan

研究代表者

鈴木 義弘（SUZUKI YOSHIHIRO）

大分大学・工学部・准教授

研究者番号：30244156

研究成果の概要（和文）：

家族共用空間の拡充志向は、1階に設けられる和室（タタミ室）の居間空間への従属化ないしは不要化（1階1室化）として形象化しており、この傾向は面積水準に依拠せず進んでいることを指摘した。

しかしその一方、この供給実態が必ずしも居住者の住要求をそのまま反映したものとは単純にはとらえることはできず、むしろ両者には乖離が認められるため、和室の要否や用途、起居様式の分析などを通じて、住生活全般からの観点で計画課題を明示した。

研究成果の概要（英文）：

View from the evaluation of the “common-space” on contemporary housing・ Washitu (tatami-room) were not advantage space now but support space of living-room・ and some of houses did not settle Washitu. Otherwise we recognized and showed planning problem by analysis that these tendency of supply-side are different from the requirements of residents.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学、都市計画・建築計画

キーワード：居間、座敷、和室、住宅、続き間、家族共用空間

1. 研究開始当初の背景

わが国の独立住宅の典型である「中廊下型」に対し、「居間中心型」^{※1}がもう一つ

の類型として提案されて久しい。その嚆矢は、生活改善同盟会による平和記念東京博覧会文化村出品作品（1922年）として知ら

れ、封建的家父長制に基づく接客本位から家族本位への転換を意図した平面構成である。しかし、一般居住者の生活習慣は容易には「居間中心型」に対応せず、21世紀に入るまで定着するには至っていない。紆余曲折を経ながらも、個室の確保、だんらん空間を充実させつつ住戸面積水準の向上を図ってきた過程の中で、形の上では家族中心のマイホームを実現し、加えて家族内でのプライバシー確保のためにも中廊下は温存されてきた。この点に関して、西山卯三氏の著作^{*2}が示唆深い。

まず、戦前の住宅供給実態では、関東大震災の罹災者救済のため設立された同潤会が、1928年から1937年の10年間に供給した「勤人向け分譲住宅」のうちの9割近くが「中廊下型」であったという。また戦後は、1950年発足した住宅金融公庫による住宅建設促進のため、翌1951年に標準設計240案掲載の「木造住宅平面図集」が発行され、その後改訂が加えられているが、西山氏によると、1966年改訂版での「居間中心型」は約6割を占めていたのに対して、最も注文されたのは「中廊下型」で、「居間中心型」の普及には至らなかったことが指摘されている。

しかしながら、近年なると一般に「リビング階段」と称したタイプ、すなわち、1階から2階居室へのアプローチは居間を経由する形で階段をとった「居間中心型」が急増していることを、これまでの研究で明らかにしている。

※1 これまで、「居間中心型」は、「居間の中央配置」を指す以上には、必ずしも厳密な定義がなされないまま使用されてきたといえる。本研究では、居間が住宅における動線の中心、すなわち、私室系をはじめとした主要な部屋へ向かうのに、居間を経由せねばならない平面構成を「居間中心型」と規定している。

※2 西山卯三『日本のすまいⅡ』（勁草書房・1976年）

2. 研究の目的

これまでの研究で明らかにした「居間中心型」住宅の近年における急激な普及と、その要因として指摘できるリビングルームの機能複合化に端的に表れている家族共用空間拡充志向の考察を深めることにより、現代において見出すことのできる新しい居住者ニーズをとらえると共に、これまで温存されてきた和室（座敷）の存在意義を明らかにすること、これに空調・音響・臭気などの室内環境評価などの環境工学的な分析・考察・評価を採り入れることなどにより、「居間中心型」住宅の計画論を導出することを目的としている。

3. 研究の方法

まず本研究は、ここに至るまでの一連の研究に依拠しており、下記の3期にわたる全都道府県を対象として新聞の折込広告などから収集した新築2階建の分譲独立住宅の平面構成に関する調査研究のデータをベースとしている。

第1期：九州大学青木研究室によって1982～83年に収集した新聞折込広告データ＝9,648件（[1980]と表記）／第2期：九州女子大学岡研究室を主として1998～2003年に収集した新聞折込広告データ＝5,128件（[2000]と表記）／第3期：大分大学鈴木研究室によって2007～08年に収集した新聞折込広告などのデータ＝5,879件（[2008]と表記）

表1 調査対象地域の概要

全国10地域	回収数	平均延床面積	調査年度	配布数	回収率
北海道	50	140.6㎡	2010	65	76.9%
東北 宮城県	52	144.7㎡	2008	64	81.3%
関東 千葉県	44	131.5㎡	2008	60	73.3%
北陸 石川県	55	146.4㎡	2009	77	71.4%
中部 愛知県	51	130.8㎡	2009	60	85.0%
近畿 奈良県	48	126.8㎡	2008	81	59.3%
中国 広島県	53	137.3㎡	2009	68	77.9%
四国 高知県	62	136.8㎡	2009	69	89.9%
九州 大分県	189	137.6㎡	2007	225	84.0%
沖縄	45	124.0㎡	2010	60	75.0%
計	649	136.3㎡	計	829	78.3%

そのうえで、2000年以降も分譲を続けている全国10地域の住宅団地を選定し、2012年までに戸別訪問による調査依頼をしたのち、アンケート票の回収とインタビューによる住まい方調査を行った649件が分析対象である(表1,2)。

表2 調査の内容・項目

調査内容	調査項目
建築概要	家族構成：続柄、年齢、職業、学年 入居時期(居住歴)、敷地面積、延床面積、各居室面積 建て方(建売・注文)、階数、室数構成、各居室の床仕上げ
平面構成 (居住プランと選好プラン)	階段位置(2階へのアプローチ) L-D-Kの接続形式 和室のとられ方
居住後評価	日常接客、家族生活 家庭内交流・対外交流・室内環境

4. 研究成果

(1) 家族共用空間拡充の動向

住宅の供給実態の系時変化から、下記のような注目すべき傾向を読み取ることができ、すなわち近年においては家族空間拡充化が進行していることを明らかにした。

①居間中心型の急伸：21世紀に入ったあたりから、それまで圧倒的に主流であった中廊下型住宅の減少に代わって、居間中心型住宅の構成比が顕著に上昇し始めている。すなわち、家族の団らん空間としての居間を内部動線の中心に配置する平面構成が急伸している(図1)。この傾向は、1階床面積の多寡とは相関のないこと(1階床面積が狭小な場合の廊下部分の有効利用とは限らないこと)も指摘できる(図2)。また、これと符合して、居間空間の床面積も徐々に増加している(図3)。

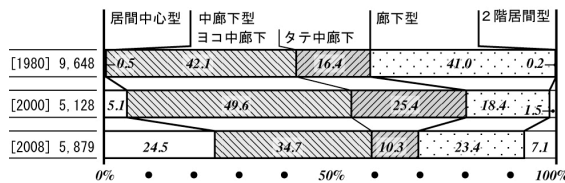


図1 内部動線の系時変化

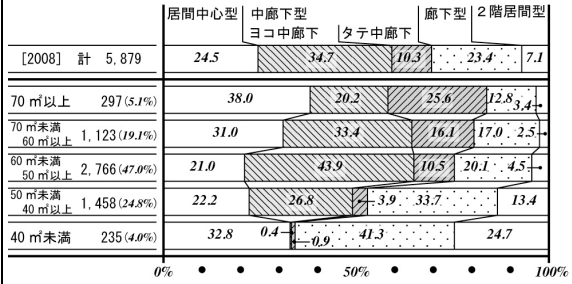


図2 1階床面積別の内部動線 [2008]

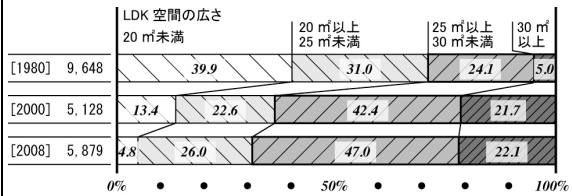


図3 LDK空間面積の系時変化

②和室の従属空間化：室数構成で見ると、1階2室が78.0%を占めており、この2室とはLDK空間と和室(タタミ室)であるが、その和室の平面構成を「分離型(一つ間型)」と「連続型(和洋続き間型)」「和室なし」でとらえると、「連続型」が6割を超えており、さらにこの「連続型」の和室のアプローチの形式を「双方型」(和室へは直接および居間からもアプローチ可能なタイプ)と「一方向型」(和室へは居間を経由せねばアプローチができないタイプ)に細分すると、後者の増加傾向が顕著である(図4)。このことは、従来は優先確保されてきた和室が居間に従属化していると解釈することができる。

③和室の非設置化：和室を持たない平面構成も2割を上回るに至っており、居間拡充の優先度が確実に高まっていることを示している。

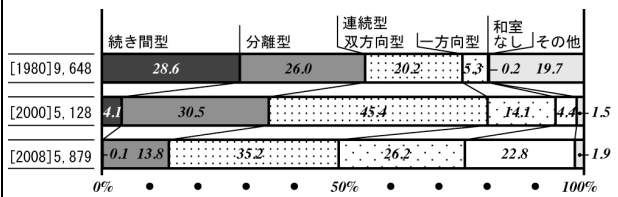


図4 和室平面構成の系時変化

(2) 計画課題-1：和室の要否・平面構成

しかしその一方で、和室に対する希望用途や選好する平面構成の分析と関係づけるならば、上述した供給実態の示す傾向が必ずしも居住者の住要求に則したものとはいえず、むしろ両者には大きな乖離があることに極めて重要な問題点を内包しており、この点を十分に考慮せねば相応しい平面構成は実現しないという下記の計画課題を明らかにした。

①和室の要否について：「和室なし」が増加しているけれども、取得した住宅に和室はないができれば設けたかったという「断念層」が約半数存在しており（表3）、家族共用空間（居間）拡充を志向の結果ではあるが、和室を不要とは考えていない居住者層が多く存在している。

②和室の平面構成の選好：居住者が望ましいと考える和室の平面構成（＝選好プラン）は、居住プランとは大幅に食い違っており、供給実態では和室の連続・縮小志向が明確であることとは逆に、選好においては居間との分離・拡大志向が顕著に高い（表3）。

この点に関して、普及の先行する北海道・沖縄県の居間中心型住宅の居住者に居住プランと選好プランの乖離は比較的少ないが、これに対して中廊下型住宅の居住者は対照的に全国と同様の傾向を示しており（表4）、この地域性の分析は、家族共用空間拡充の動向を考察する上で示唆深い。

表3 和室平面構成の居住と選好の関係

居住プラン	和室なし	選好プラン				計	和室の要否				
		和室1室			続き間型		不要層	必要層		1室	2室
		一方 向型	双方 向型	分離 型				1室	2室		
和室なし	43 56.6	断念 43.6% 7.9	11 14.5	7 9.2	9 11.8	76 13.4	43 56.6	24 31.6	9 11.8		
和室1室	一方 向型	不要 13.6% 21 12.8	温存 60.8% 37 22.6	52 31.7	15 9.1	39 23.8	164 28.9	21 12.8	104 63.4	39 23.8	
	双方 向型	21 12.6	13 7.8	58 34.7	22 13.2	53 31.7	167 29.4	21 12.6	93 55.7	53 31.7	
	分離 型	21 15.2	5 3.6	17 12.3	66 47.8	29 21.0	138 24.3	20 15.2	88 63.8	29 21.0	
	続き 間型	4 17.4	縮小 30.4% -	4 17.4	3 13.0	12 52.2	23 4.0	4 17.4	7 30.4	12 52.2	
計	110 19.4	61 10.7	142 25.0	113 19.9	142 25.0	568 100.0	110 19.4	316 55.6	142 25.0		

表4 内部動線に関する居住・選好プランと地域性

地域	居住プラン	選好プラン						計	
		必要層					不要層		
		温存層			拡大層				
比率 (%)	一方 向型	双方 向型	分離 型	続き 間型	和室なし				
上段：他の 8地域 下段：北海道 沖縄	居住プラン	和室1室	一方 向型	13.6 (8)	42.4 (25)	13.6 (8)	16.9 (10)	13.6 (8)	33.5 (59)
			双方 向型	52.4 (11)	4.8 (1)	9.5 (2)	19.0 (4)	14.3 (3)	48.8 (21)
		和室なし	分離 型	6.3 (3)	35.4 (17)	16.7 (8)	25.0 (12)	16.7 (8)	27.3 (48)
			続き 間型	16.7 (1)	0.0 (0)	16.7 (1)	66.7 (4)	0.0 (0)	14.0 (6)
		和室なし	和室なし	7.4 (2)	18.5 (5)	51.9 (14)	7.4 (2)	14.8 (4)	15.3 (27)
			和室なし	33.3 (1)	0.0 (0)	66.7 (2)	0.0 (0)	0.0 (0)	7.0 (3)
		和室なし	和室なし	0.0 (0)	11.1 (1)	33.3 (3)	44.4 (4)	11.1 (1)	5.1 (9)
			和室なし	- (0)	- (0)	- (0)	- (0)	- (0)	0.0 (0)
		和室なし	和室なし	0.0 (0)	15.2 (5)	6.1 (2)	6.1 (2)	72.7 (24)	18.8 (33)
			和室なし	30.8 (4)	0.0 (0)	0.0 (0)	7.7 (1)	61.5 (8)	30.2 (13)
和室なし	計	7.4 (13)	30.1 (53)	19.9 (35)	17.0 (30)	25.6 (45)	100.0 (176)		
	計	39.5 (17)	2.3 (1)	11.6 (5)	20.9 (9)	25.6 (11)	100.0 (43)		
下段：北海道 沖縄	居住プラン	和室1室	一方 向型	23.8 (15)	33.3 (21)	6.3 (4)	25.4 (16)	11.1 (7)	20.2 (63)
			双方 向型	17.6 (3)	17.6 (3)	5.9 (1)	41.2 (7)	17.6 (3)	45.9 (17)
		和室なし	分離 型	7.7 (8)	35.6 (37)	11.5 (12)	33.7 (35)	11.5 (12)	33.3 (104)
			続き 間型	0.0 (0)	57.1 (4)	0.0 (0)	28.6 (2)	14.3 (1)	18.9 (7)
		和室なし	和室なし	2.0 (2)	12.0 (12)	46.0 (46)	25.0 (25)	15.0 (15)	32.1 (100)
			和室なし	0.0 (0)	0.0 (0)	25.0 (1)	50.0 (2)	25.0 (1)	10.8 (4)
		和室なし	和室なし	0.0 (0)	22.7 (5)	13.6 (3)	50.0 (11)	13.6 (3)	7.1 (22)
			和室なし	- (0)	- (0)	- (0)	- (0)	- (0)	0.0 (0)
		和室なし	和室なし	4.3 (1)	26.1 (6)	17.4 (4)	8.7 (2)	43.5 (10)	7.4 (23)
			和室なし	11.1 (1)	0.0 (0)	11.1 (1)	44.4 (4)	33.3 (3)	24.3 (9)
和室なし	計	8.3 (26)	26.0 (81)	22.1 (69)	28.5 (89)	15.1 (47)	100.0 (312)		
	計	10.8 (4)	18.9 (7)	8.1 (3)	40.5 (15)	21.6 (8)	100.0 (37)		

③居間の起居様式と和室の関係：和室のとられ方は、居間の起居様式にも強く影響を与えている。和室との連続性が高い場合の居間はイス坐化が進み、独立性が高くなるとイス坐・ユカ坐併用とする傾向が強くなるのであるが、選好プランで分析してみると、機能分化の進んだ前者の評価は低く、後者を選好する比率が顕著に高くなる（図5）。この起居様式の観点においても、供給実態では和室の連続・縮小志向とは対比的に、選好では居間との分離・拡大志向を示している。

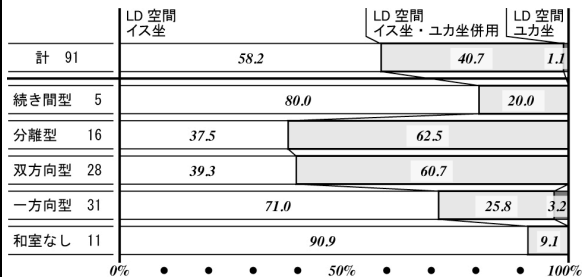


図5 和室の平面構成と起居様式の関係

(3) 計画課題-2：和室の用途について

①接客機能の温存志向：和室の現状の用途

と希望する用途との間にも乖離も大きく、依然として、ことにライフステージが進むに従い接客機能を求める傾向が強い(図6)。これが居住と選好プランの不一致の大きな要因であること。

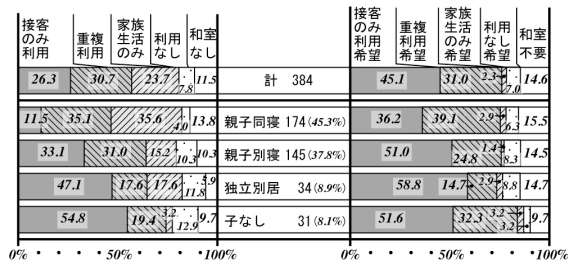


図6 和室に求める用途

②就寝室の流動性：住まい方の系時的变化でみた各家族成員の就寝室は流動性が高くそのパターンも極めて多様であった(図7)。いずれも和室の存在がこの柔軟性を促進ないしは保障していると評価することができる。

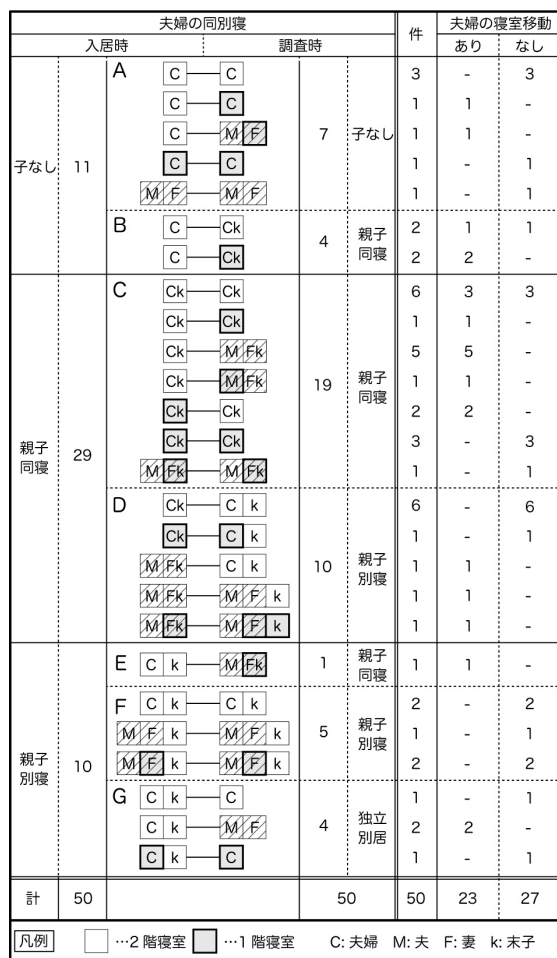


図7 就寝形態の変化

(4) まとめ

家族共用空間拡充志向は、間違いなくこれからの住宅平面構成の主要な志向性のひとつとして定着してゆくであろうと考えられる。しかしながら、その発展的な計画あるいは代償としての、和室の補助空間化や和室の非設置化は、選好調査に基づく分析からみると顕著に否定的な評価であった。その要因として考えられるのは、①和洋続き間(居間と和室の連続性)は、必ずしも融通性の高い空間を保障しているとはいえず、むしろ性格の曖昧な結果をもたらしているのではないかと、②和室の持つ自由度は就寝室の流動性や接客などの対社会性を温存するうえで依然として有効に働いているのではないかと、ということである。これら住戸内生活全般を視野に入れながら家族共用空間の拡充が図られねばならないと結論づけることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 21 件)

- ① 竹田津誠二・鈴木義弘・湯浅裕樹・岡敏江・切原舞子「プラン選好からみた座敷(和室)の分析」日本建築学会九州支部研究報告会、2013年3月3日、大分大
- ② 高岡大輔・鈴木義弘・湯浅裕樹・岡敏江・切原舞子「LD空間と和室のしつらえからみた起居様式と和室のプラン選好について」日本建築学会九州支部研究報告会、2013年3月3日、大分大
- ③ 湯浅裕樹・鈴木義弘・岡敏江・切原舞子「戸建て住宅における寝室移動の分析」日本建築学会大会学術講演、2012年9月13日、名古屋大
- ④ 高岡大輔・湯浅裕樹・鈴木義弘・石川友樹・岡敏江・切原舞子「LD空間と和室のしつらえからみた起居様式と和室のとりえ方の関係について」日本建築学会大会学術講演、2012年9月13日、名古屋大

- ⑤ 石川友樹・湯浅裕樹・鈴木義弘・高岡大輔・岡敏江・切原舞子「LD空間と和室の起居様式と使われ方の関係について」日本建築学会大会学術講演、2012年9月13日、名古屋大
- ⑥ 鈴木義弘・竹田津誠二・湯浅裕樹・岡敏江・切原舞子「和室のとられ方と選好からみた地域性の分析」日本建築学会大会学術講演、2012年9月13日、名古屋大
- ⑦ 竹田津誠二・鈴木義弘・湯浅裕樹・岡敏江・切原舞子「和室の用途からみた地域性の分析」日本建築学会大会学術講演、2012年9月13日、名古屋大
- ⑧ 湯浅裕樹・鈴木義弘・岡敏江・切原舞子「内部動線からみたLDK空間と階段位置のプラン選好について」日本建築学会九州支部研究報告、2012年3月4日、西日本工大
- ⑨ 湯浅裕樹・鈴木義弘・岡敏江・切原舞子「和室の使われ方からみたプラン選好について」日本建築学会九州支部研究報告、2012年3月4日、西日本工大
- ⑩ 石川友樹・鈴木義弘・湯浅裕樹・光永宜玄・岡敏江・切原舞子「室内温熱環境シミュレーションによる年間冷暖房負荷量について」日本建築学会九州支部研究報告、2012年3月4日、西日本工大
- ⑪ 光永宜玄・鈴木義弘・湯浅裕樹・石川友樹・岡敏江・切原舞子「室内温熱環境シミュレーションによる冷暖房負荷の月別負荷量と1日の系時変化について」日本建築学会九州支部研究報告、2012年3月4日、西日本工大
- ⑫ 竹田津誠二・鈴木義弘・湯浅裕樹・岡敏江・切原舞子「和室のプラン選好と使われ方の地域性について」日本建築学会九州支部研究報告、2012年3月4日、西日本工大
- ⑬ 小川展弘・鈴木義弘・湯浅裕樹・岡敏江・切原舞子「平面構成と居室の使われ方について」日本建築学会九州支部研究報告、2012年3月4日、西日本工大
- ⑭ 小川展弘・鈴木義弘・湯浅裕樹・岡敏江・切原舞子「夫婦の就寝形態に着目した就寝場所の移り変わりについて」日本建築学会九州支部研究報告、2012年3月4日、西日本工大
- ⑮ 白井宏生・鈴木義弘・湯浅裕樹・岡敏江・切原舞子「居室面積からみた和室への要求構造の分析」日本建築学会九州支部研究報告、2012年3月4日、西日本工大
- ⑯ 竹田津誠二・鈴木義弘・岡敏江・湯浅裕樹・切原舞子「座敷設置状況の系時変化と地域性」日本建築学会大会学術講演、2011年8月24日、早稲田大
- ⑰ 小川展弘・鈴木義弘・岡敏江・湯浅裕樹・切原舞子「居室の使われ方についての分析」日本建築学会大会学術講演、2011年8月24日、早稲田大
- ⑱ 石川友樹・鈴木義弘・岡敏江・湯浅裕樹・切原舞子「床の間の要否と座敷（和室）の使われ方の関係について」日本建築学会大会学術講演、2011年8月24日、早稲田大
- ⑲ 光永宜玄・鈴木義弘・岡敏江・切原舞子・湯浅裕樹・高岡大輔・白井宏生「居間中心型と中廊下型住宅における居住後評価について」日本建築学会大会学術講演、2011年8月24日、早稲田大
- ⑳ 白井宏生・鈴木義弘・岡敏江・切原舞子・湯浅裕樹・高岡大輔・光永宜玄「1階平面構成に着目した居住プランと選好プランの関係」日本建築学会大会学術講演、2011年8月24日、早稲田大
- ㉑ 高岡大輔・鈴木義弘・岡敏江・切原舞子・湯浅裕樹「和室の使われ方とライフステージの関係からみたプラン選好について」日本建築学会大会学術講演、2011年8月24日、早稲田大

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 義弘 (SUZUKI YOSHIHIRO)

大分大学・工学部・准教授

研究者番号：30244156

(2) 研究分担者

岡 敏江 (OKA TOSHIE)

九州女子大学・家政学部・教授

研究者番号：90223990

(3) 連携研究者

切原舞子 (KIRIHARA MAIKO)

千葉大学・工学部・非常勤講師

研究者番号：60548345